

## エッセイコンテスト2等賞

### <ことば>の贈り物

荒このみ

それは偶然のことだったのだろうか。

<白ひげ>先生のフランス交流記を読んでいると、トゥシャール先生が徳島にやって来たのが偶然ではなく、見えない糸に導かれた必然だったように思えてくる。

フランス文化の発展のために強い意志を持って来日したトゥシャール先生だが、たったひとりの努力ではうまくいかなかっただろう。周囲からの強力な助けがなかったら、空振りに終わっていたに違いない。そこに現れたのが<白ひげ>先生だった。遠い昔にアテネ・フランセでフランス語を勉強したという、過去の記憶が呼び起こされる。徳島でフランス語の教室が開かれ、<白ひげ>先生ご一家の熱心な参加のもとに、子どもたちがフランス語を学び、フランス文化を体験するようになる。

このような草の根活動こそ意義深く、そして子どもころの異文化体験ほど重要なものはない。素直な子どもたちには政治的立場など関係なく、その国を知り親しみを覚えるようになる。それは大人になってから偏見なく他国を見る姿勢につながり、心の結びつきが理性的判断を促すことにもなる。<白ひげ>先生のお子さまにとって、おそらくフランス語・フランス文化は精神形成の大きな一部になっているだろう。

その昔、徳島にはポルトガルから軍人・外交官・作家のモラエスがやって来て、徳島の物語をポルトガルに紹介した。作家の新田次郎は『モラエス伝』を書き、これは未完に終わったが、モラエスの業績や評伝が日本でいくつか出版されている。松江に来たラフガディオ・ハーンを思い出してもいい。かれらの存在は日本ばかりか相互の国々の文化を豊かなものにしていく。後世の私たちは、日本にいても日本にこもることなく、豊かな異国の文化を学び味わうことができる。

異なる文化背景の人びとと情愛を交わし交流するのに言葉はいらない、という考えもあるが、それは基礎的部分での人間的な交流である。「はじめに言葉ありき」。私たち人間が動物と異なるのは言葉を持ったことである。お互いを十分に理解し、その友情を深めるために相互的な言葉の理解は欠かせない。

定年になり時間的余裕ができた私は、アテネ・フランセでまず文学の授業を取りたいと考えた。原語で読まなければ文学作品の価値は半減するだろう。翻訳とはある意味で日本語による創作なのだから。

基礎的なフランス語の勉強を終えていたとはいえ、フランス人教師によるフランス語の講義に戸惑った。一つの単語を辞書で何十回と引き直し、それでも記憶できない自分にあきれ果て、いっぽう先生の説明も完璧には聞き取れない。クラスの落ちこぼれと情けなく思いながら、今のところ必死になって通っている。ゾラの『ジェルミナール』を読み、フランスの炭鉱夫の生活を知ったばかりか、先生による言葉の詳しい解説によって、情景描写の読みが深まってくる。各期に一作品を読み終えながら、これからいったい何冊、原語でフランス文学を楽しめるのだろうか、<ことば>の贈り物をどれだけ受け取るのだろうかと考えると、こころ軽やかに嬉しくなってくる。